

臨床の知とケアの理論のために

中 村 正

(人間科学研究所専任研究員・産業社会学部)

1 「ケア新時代・対人援助のフロンティアと臨床の知」の企画とそのねらい

立命館大学人間科学研究所は、2000年度より文部科学省「学術フロンティア推進事業」に指定された「対人援助と人間環境デザイン」プロジェクト*に取り組んでいる。

当プロジェクトは、21世紀がヒューマンサービスと対人援助の時代となることに対応した社会環境創造と援助実践についての研究をめざしている。これまで、福祉、心理、教育、司法へと細分化・専門化されていた対人援助実践を「連携・融合」するためのコミュニティを基礎としたネットワーク形成が大切だと考えたからだ。

現在、コアプロジェクト、サブプロジェクトをベースにして対人援助にかかわる基礎から応用までの幅広い共同研究をすすめている。その一環として、対人援助のフロンティアに学ぶ企画を実施した。それが、「ケア新時代・対人援助のフロンティアと臨床の知」シリーズと称した連続研究会である。対人援助の最前線で生成しつつある「臨床の知」の輪郭をクリアにしたいと考えたからだ。対人援助の分野をこえて交流することは、本来が人間の生死やwell-beingにかかわる主題なので当然のことなのではあるが、意外にもできていないことが多い。本研究プロジェクトでは、そのような対人援助の実践と理論の両面における「連携・融合」を志向している。ケア新時代と称して企画した一連の主題は、それぞれ、医療と障害、司法と福祉、被害と加害、福祉と心理、音楽と治療、障害種別をこえた統合教育など、すべて何らかの意味での「連携と融合」を含んだものであるし、そうであるがゆえに新しい問題提起となっている。臨床の知とケアは21世紀の知的

関心の極となりつつある。連携と融合はときには相互批判を含むという意味ではスリリングでさえある。

しかし、学問としてこうした分野を創生していく際には、社会的に関心の高い話題であるがゆえに時事的関心になりがちなことには警戒が必要だろう。ケアと臨床について関心が集まる時代とはどんな社会なのか、ケアと臨床を科学的に対象化するにはどんな概念や方法が考えられるのか、工学的な機器援助から宗教的なスピリチュアリティまでの、さながら異文化間コミュニケーションのような対話の必要性など広範な領域にまたがる課題がある。そして、分野の異なる個別の実践や事例に学ぶ方法やコミュニケーションモードはどのようにして探求できるのかも課題となる。

こうした課題意識をもって企画した「ケア新時代・対人援助のフロンティアと臨床の知」の記録を残し、今後の研究に役立てるために本シリーズのひとつとして刊行することとした。

2 企画の内容

上記のようなねらいで実施した2001年度企画の案内を以下のようにした。今回、掲載しなかった分はシリーズの第二号に掲載する予定である。

2001年11月21日(水)

「コミュニケーションとしての音楽 音楽療法を体験する 」

アラン・ウイッテンバーグさん(米国メイン州サリー音楽療法センター所長)

アートはセラピー的な作用をはたします。情動に働きかける強い心的エネルギーの磁場となります。音楽は癒しのリズムとしてなくてはならないコミュニケーションの様式です。音楽療法は、援助のためにこのエネルギーを用いるコミュニケーション療法ともいえます。実際に楽器を使って、コミュニケーションとしての音楽療法を楽しみながら、話をすすめていきます。

〔国際学術交流研究会として開催〕

第1回 2001年11月30日(金)

「地域の中の学校 ノーマリゼーション時代の養護学校の機能」

朝野 浩さん(京都市立西養護学校長)

現在、養護学校の地域制、総合制という改革の中で、本来的な意味での個別教育を実現するために、どのようなプログラムが必要とされているのかを考えます。ノーマリゼーション、インクルージョンといった理念の実現に向けて、学校を単位としてそれを実践的に展開する上での具体的な課題と現状での進展状況について具体例をもとに話していただきます。

第2回 2001年12月5日(水)

「修復的少年司法の取り組み 司法福祉のフロンティア」

井垣康弘さん(神戸家庭裁判所判事)

傷害致死事件のような重大非行を犯した少年への対応が厳罰化(原則として成人と同様に刑罰を科す)の方向へと変化しました。しかし、本当に問われなければならないことは「償いつつ生きるとはどういうことか」についてです。非行をおかした加害少年の更生と被害者の癒しと地域の安全回復の三者を同時に追求する司法福祉のユニークな実践が展開されています。加害者と被害者という二分法をこえた、関係回復的・修復的な司法として注目を集めています。その最前線に学びます。

第3回 2001年12月7日(金)

「障害に向き合う医療 医師として・父親として」

山川 孔さん(日本バプテスト病院小児科医師)

N I C U に勤務する医師であると同時に自閉症児の父である「二重性」の体験をもとにして、医療と障害と援助のあり方を考えてみます。自宅に帰れば障害児が待っているという医師が、勤務先で、障害を持った赤ちゃんとご両親にどう接するかという、とても個人的な体験の「二重性」をミクロに徹底して問うことの中に、援助者の自己変容、専門家のあり方、障害者のQ O Lの課題などがみえてきます。

第4回 2001年12月21日(金)

「家族の不思議 児童相談所でのソーシャルワーク実践から 」

川崎二三彦さん(京都府京都児童相談所)

虐待、非行、暴力など家族をめぐる問題に関心が集まっています。児童相談所のソーシャルワーカーとしての仕事をおして見えてくる「家族の光と影」について、事例をもとに話していただきます。それにしても家族は不思議です。何かの問題をかかえながら生きているシステムです。援助によっては、関係を修復していく力を内包しているからです。「川崎実践」とでもいえる援助の心と技に学びたいと思います。

第5回 2002年1月18日(金) 18:00～20:00

「21世紀のコミュニティを創生する『エコマネー』」

中山 昌也さん(エコマネー・ネットワーク事務局長)

従来の市場経済の尺度では計れない価値(善意など)を、“時間”という尺度で評価した上で交換し流通させる新しい通貨、それが「エコマネー」です。コミュニティの活性化を図るため人と人のコミュニケーションを再生します。2年前から始まり、全国約100ヶ所で実験が行なわれています。

第6回 2002年3月6日(水) 18:00～20:00

「ホリスティックな教育実践 思春期の自尊感情を育む参加型学習 」

^{キム} ^{カユリ}
金 香百合(大阪YWCA教育総合研究所所長)

参加型のファシリテーターとして、全国各地の学校や生涯学習分野で多様なテーマに取り組んでいます。健全な自尊感情を育むことはあらゆる社会問題や暴力を解決していくための根本的課題です。今回は思春期・自尊感情・ケアリングとしての教育・ホリスティックなアプローチをキーワードにしながら、効果を上げている実践について話します。

第7回 2002年3月12日(火) 18:00～20:00

「コミュニティと対人援助 支えあいとは 」

田原 明夫（京都大学医療技術短期大学部教授・精神科医）

対人関係の「問題」とは個人だけの問題なのでしょうか？

「障害」や「病気」いろんな「生き辛さ」とは私達にとってどんな意味を持っているのでしょうか？

個人や機関がそれぞれの限界を持ちながら、コミュニティの中で「問題」を抱えていけるためには、何ができるのかを考えます。

コミュニティ・ケアを推進するための提案です。

〔企画協力：心理・教育相談センター〕

3 対人援助を研究する手法 対人援助を科学するために

引き続き、対人援助のフロンティアと称して研究を進めていく予定であるが、融合と連携という新領域で生成している対象であるがゆえに既存のディシプリンで構築された手法や方法にくわえて、分野横断的な実践を把握するための手法についても敏感でなければならない。同じ言葉を使用している、ディシプリンが異なれば解釈や理解が揺れるからである。実践や事例をボトムアップ方式の帰納的な手法を用いて機能分析しながら、共通のコミュニケーションモードを探り、対人援助実践を科学することを試みたい。

記述の方法としての共通のコミュニケーションモードを探るためには、たとえば、エスノメソドロジー、グラウンディッドセオリー、アクションリサーチ、参与観察法、一事例研究法などの「共通言語」が必要となるだろう。さらに、個々の対人援助を社会的な文脈で位置づけなおすには、ヒューマンサービスとして援助実践の組織化過程(マネジメント)をとらえなおす作業が必要だろう。さらに、自己決定、権利擁護、倫理問題など、対人援助の最先端課題がどのようにして存在しているのかもクリアにしてみたい。

融合と連携をすすめるためには、記述・観察の共通言語の探求、ボトムアップ的な事例分析の積み重ね、自己決定などの倫理問題の確認という丁寧な作業を継続することが大切である。対人援助のフロンティアのそれぞれの専門家としての巧みな技と心に学びつつも、こうした臨床の知やケアへの理論的関心をもちつつ

けたいと思う。

* 尚、今回採択された学術フロンティア推進事業の予算には立命館大学衣笠総合研究機構のプロジェクト経費が含まれている。